

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K03040

研究課題名(和文) 大学生の自己調整学習を促す対面・オンラインチュータリングによる学習支援環境の開発

研究課題名(英文) Development of learning support environment by face-to-face and online tutoring to promote self-regulated learning in higher education

研究代表者

岩崎 千晶 (Iwasaki, Chiaki)

関西大学・教育推進部・准教授

研究者番号：80554138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究の目的は「大学生の自己調整学習を促す対面・オンラインチュータリングにおける学習支援環境を開発、評価する」ことである。「論証型ライティングにおける自己調整学習方略の提示」では、調整方略因子と援助要請方略因子の2因子9項目から構成される論証型レポートライティング尺度(DRAW9)を開発した。「対面・オンラインチュータリングにおける教授方略の導出」ではオンラインチュータリングを実施したチューターにヒアリング調査をし、質的に分析した。「チュータリングのためのブレンディッドラーニング教材の開発と評価」では大学を対象に質問紙調査を実施し分析をし、教材の作成も行った。これらの結果を学会・論文で報告した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「論証型ライティングにおける自己調整学習方略の提示」では自己調整学習理論を背景に、論証型レポートライティング尺度DRAW9を開発した。これまで同様なものは見受けられない。「対面・オンラインチュータリングにおける教授方略の導出」ではオンラインチュータリングに取り組むチューターが配慮すべき方略について明らかにできた。「質保証のためのチュータリング評価指標・指標別ブレンディッドラーニング教材の開発と評価」では大学(789大学)における調査を実施し、コロナ禍でオンラインチュータリング始めた大学が多かったが、ノウハウがなく実施にできずにいた大学もあり、今後改善していく必要性を学会、論文にて報告した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study was to "develop and evaluate a learning support environment in face-to-face and online tutoring that promotes self-regulated learning among college students. For the "Presentation of Self-Regulation Learning Strategies in Argumentative Writing," we developed the Argumentative Report Writing Scale (DRAW9), which consists of nine items with two factors: a coordination strategy factor and a help-seeking strategy factor. In "Derivation of Teaching Strategies for Face-to-Face and Online Tutoring," we conducted interviews with tutors who had implemented online tutoring and analyzed the results qualitatively. In "Development and Evaluation of Blended Learning Materials for Tutoring," we conducted a questionnaire survey of universities, analyzed the results, and developed teaching materials. These results were reported at conferences and in papers.

研究分野：教育工学

キーワード：ライティングセンター オンラインチュータリング アカデミックライティング チュータリング 学習支援 高等教育 アカデミックスキル

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

高等教育における教育の質を保証するため、学生は授業外にも学びに従事する必要性が求められている。しかし学生が授業外学習に活用する時間は十分ではなく課題となっている。学生が授業外にも円滑に学ぶためには「目標設定、計画、実施、修正、社会的支援の要請を適切に行い、自己調整する力」を培うことや、学生が課題を適宜相談できるチュータリング等の学習支援環境を大学が整備することが重要になる（自己調整学習研究会、2012）。そのためには「学習者に適した自己調整学習方略の提示」「授業外に自己調整をして学ぶ手助けとなるチュータリングにおける効果的な教授方略を導出」する必要があると考える。学生の自己調整学習を促すことは生涯学び続ける人材輩出や、多様な学習動機や学力を持つ入学者の教育の質保証にも有益であり、学生の自己調整学習を促す学習支援環境の開発は高等教育にとって非常に重要な研究課題であるといえる。

しかし自己調整学習を促すための学習支援に関する研究課題は、学習支援を行うチューターの教育研究が中心である。これらの研究はチューターの力量形成において意義深いが、チュータリングを活用する学習者に着目した学習プロセスやチュータリングに関する教授プロセスに関する研究知見は十分とは言えない。そのため、今後は学習者の自己調整学習を促すため、「学習者は学習支援を活用してどう自己調整をし、学んでいるのか」また「どのようなチュータリングが、学習者の自己調整に有益であるのか」に関する研究知見が必要不可欠であると考えた。

次に、チュータリングに関して、北米と比較すると、日本はオンラインチュータリングの研究が遅れている。オンラインは場所を気にせず就職活動・フィールドワークの際にも支援を受けやすく、この先さらに普及するであろう BYOD 環境での活用も期待できる。しかし、日本でオンラインチュータリングを扱った研究知見は皆無である。そこで我が国において「オンラインチュータリングにおいて何に配慮し、自己調整する学生をどう教授・支援することが望ましいのか」を調査する必要があると考えた。

さらに、チューター教育には研究知見が蓄積されているが、各研修が単発に行われ、チューターの力量に応じた体系立てた研修が構築されているとはいえない。今後は「チューターの質を保証するためにどういった評価指標を採用し、その指標に基づいて体系的な研修をどう実施すればよいのか」に関する研究を推進する必要があると考えた。

以上のような背景から、本研究では対面・オンラインチュータリングにおける自己調整学習方略・教授方略の導出、チュータリング評価指標や指標別の教材開発と評価を行い、大学生の自己調整学習を促すための学習支援環境を開発、評価することとした。

2. 研究の目的

本研究では、高等教育において学習者が目標設定、計画、実施、修正、社会的支援の要請を適切に行い、自己調整すること、ならびにチューターが学習者の自己調整を促すことに従事できる学習支援環境の構築を目指し、「大学生の自己調整学習を促す対面・オンラインチュータリングにおける学習支援環境を開発、評価する」ことを研究の目的とする。

具体的な研究課題として、日本語ライティングに焦点をあてた「研究課題 論証型ライティングにおける自己調整学習方略の提示」「研究課題 対面・オンラインチュータリングにおける教授方略の導出」「研究課題 質保証のためのチュータリング評価指標・指標別ブレンディッドラーニング教材の開発と評価」を行う。3つの研究課題を遂行することで、学習者が目標設定、計画、実施、修正、社会的支援の要請を適切に行い、自己調整すること、またチューターが学習者の自己調整を促すことに従事できる学習支援環境の構築を目指す。

なお、本研究で扱う学習支援の内容は論証型ライティングとする。高等教育において論証型ライティングの力をつけることは非常に重要であるが、学生は授業外にレポートや卒論を執筆することが多く、課題を抱えていることが問題視されている。つまり、論証型ライティングは自己調整による学習が重要であるが、自分ひとりでその課題を解決できない部分も多く、学習支援が必要な分野だと判断した。実際、文部科学省によるとライティングセンター等でライティングのチュータリングをする大学は2015年72大学(9.4%)で2011年から約30大学以上増加しており、学習支援のニーズも高いと言える。

3. 研究の方法

本研究では、3つの研究課題を達成することで研究目的を明らかにし、大学生の自己調整学習を促す対面・オンラインチュータリングにおける学習支援環境を開発、評価する。本研究でいう学習支援環境は「論証型ライティングにおける自己調整学習方略の提示、対面・オンラインチュータリングにおける教授方略の導出、質保証のためのチュータリング評価指標・指標別ブレンディッドラーニング教材の開発」である。各研究課題は相互に関連しており、これらを順序立てて進めた。先行研究の整理、質問紙調査、インタビュー調査からデータを収集し、各研究課題の目的に応じたアプローチを適宜用いて分析した。各研究課題における研究方法を以下に示す。

「論証型ライティングにおける自己調整学習方略の提示」では、大阪府下の私立 A 大学、同私立 B 大学の大学生の計 171 名を対象とし、「論証型レポートに対する取り組み」調査を 2019 年 12 月から 2020 年 1 月末までにかけて実施した。自己調整学習に基づく学びのプロセスに関連すると考えられる 6 つの先行研究として藤田(2010)、北澤・永井・上野(2010)、瀬尾(2007)、佐藤・新井(1998)、梅本(2013)、Weinstein & Palmer(2002)を選定した。次に、選定された研究のなかで、論証型レポートに関する自己調整学習の測定に適用可能と考えられる 63 項目を選出した。選出された項目内容が自己調整学習の測定内容を反映したものであるかどうか、論証型レポートの文脈にあてはまるかどうかについて検討し、論証型レポートの文脈に通じない項目及び意味内容が重複する 18 項目を除外した結果、45 項目を抽出した。これらの項目に対して、項目内容の意味が通じるように、質問内容の形式を一部改編し、書式を統一し、最終的に 47 項目から成る仮の尺度を作成した。

47 項目それぞれについて 144 のデータでの得点の分布を中心に項目の分析を行い、すべての項目について、「1:まったくあてはまらない」「2:あまりあてはまらない」「3:どちらかといえばあてはまる」「4:ある程度あてはまる」「5:とてもよくあてはまる」の分布があったが、それぞれ 1 点から 5 点の素点を用いて得点化し、各項目について平均と標準偏差を算出し、平均 + 標準偏差が 5 点を超えるものを天井効果 (ceiling effect) のあらわれたもの、平均 - 標準偏差が 1 を下回るものを床効果 (floor effect) のあらわれたものとして、分析対象としての質問項目からは排除した。その結果 8 項目が削除されたため、39 項目 144 名のデータに対し、因子分析を施した。(山田ほか 2020 からの一部抜粋引用)

「研究課題 対面・オンラインチュータリングにおける教授方略の導出」「研究課題 質保証のためのチュータリング評価指標・指標別ブレンディッドラーニング教材の開発と評価」では、まず、各大学におけるライティングセンターが実施するオンラインチュータリングの現状を把握するため、日本の 4 年制大学を対象に質問紙調査を実施した。2020 年 11 月に国立 86 件、公立 92 件、私立 611 件の計 789 大学に調査を依頼し、2021 年 1 月末日まで 1 大学 1 件の回答を受け付けた。206 大学 (国立 23 件、公立 32 件、私立 150 件、不明 1 件) から回答があり、回収率は 26.1%であった。そのうちライティングセンター「あり」と回答した 55 大学 (26.8%) (国立 5 大学 (9.1%)、公立 2 大学 (3.6%)、私立 48 大学 (87.3%)) の結果を取り上げ、考察を行った。

また、オンラインチュータリングの教授方略についてより深く調査し、質問紙調査では知ることができない部分を補うために、オンラインチュータリングの経験があるライティングセンターチューターを対象にインタビュー調査を実施した。具体的には、リアルタイム型オンラインチュータリングを経験した A 大学ライティングセンターのチューター 6 名に対して、2020 年 8 月に半構造化インタビューを 1 時間程度実施した。チューターに関しては、相談歴が混在するように 6 名 (相談歴 1~2 年目: 2 名、3~5 年目: 2 名、8~9 年目: 2 名) を選出した。

インタビューでは、チュータリングのプロセスに沿ったチュータリングの方法、配慮している点、対面のセッションとの違い、オンラインチュータリングの効果と課題等を尋ね、筆者と自由に対話する形式をとった。それらの内容については文字に起こし分析に用いた。

分析は箕浦(2009)、山本ほか(2017)、岩崎(2020)の手続きを参考に、意味のまとまりであるフレーズ毎にコードを付けるオープンコーディングを行った。そして、軸足コーディングをし、オープンコーディングの結果を比較、同一の性質を持つ複数のコードをまとめ、コアカテゴリーを作成するようにした。また、コアカテゴリー間の関係性を検討し、同一のものをまとめカテゴリーグループ (CG) を生成した。これらの調査を基に、チュータリングにおけるブレンディッド教材開発企画に活用した。(岩崎 2022 からの一部抜粋引用)

4. 研究成果

「大学生の自己調整学習を促す対面・オンラインチュータリングにおける学習支援環境を開発、評価する」ことを研究の目的とし、次の 3 点の研究課題に取り組んだ。研究成果の詳細については論文を参照されたいが、以下に成果のまとめを記す。

「研究課題 論証型ライティングにおける自己調整学習方略の提示」に関しては、論証型レポートに取り組む大学生 144 名のデータに因子分析を施し、調整方略因子と援助要請方略因子の 2 因子 9 項目から構成される論証型レポートライティング尺度 (DRAW9; Demonstrative Report based on Academic Writing 9) を開発した。この尺度では学習を個人のみで完結するものと定義するのではなく、援助要請という社会性のレベルを考慮した、レポート課題への取り組みを扱う自己調整の側面 (学習プロセスをも考慮して) を測定することが可能な尺度である。この尺度ではレポート作成課題への取り組み際、論拠を明示するような視点をもって学習活動に能動的に関与しているかどうかや (調整方略の遂行)、レポート作成において他者、特に教員に適切なかたちで援助を求めて取り組んでいたか (援助要請方略の遂行) を簡便に確認できる。また今回の尺度構成の検討からは、学生はレポート作成活動において、比較的制約が緩やかなかたちで課題への取り組みにあたる場合の方が、教員指定による比較的強い制約のある課題に取り組む場合に比べて、援助要請方略を用いやすい傾向があるものと推察された。実践的には、学習支援者側が事前に尺度を用いてレポートへの取り組み態度としての構えを推定するなどをし、効果

的な学習支援につなげていく意義もあろう。(山田ほか 2020 より一部抜粋引用)

これまでの自己調整学習に関する研究では、「個人内の学習プロセスに焦点化されていること」「ライティングは作文が中心」で、学習者が個人で作文を書くことへの自己調整学習方略は提示されているが、大学で求められる「論証型ライティング」を扱い「社会的支援の要請を含めた他者を介したライティングに関する自己調整方略」には十分に言及されていない(自己調整学習研究会, 2012)。社会的支援の要請は「仲間や教師から援助を求めること」であり、教師への支援要請や教授行動の研究知見はあるが、チューターへの社会的要請を含めた自己調整学習方略に関する研究知見はほとんどなく、扱う内容が論証型ライティングになると皆無である。これらをカバーする尺度を開発できた点は本研究の意義があるといえる。

「研究課題 対面・オンラインチュータリングにおける教授方略の導出」では、ライティングセンターを保有する 55 大学の回答から日本の大学におけるオンラインチュータリングの傾向を明らかにすることができた。まず寄せられた回答結果から「オンラインでの学習支援」は「実施している」が 41 件 (74.5%) であり、「実施していない」が 14 件 (25.5%) であることが示された。オンラインチュータリングの実施率は 74.5% と高いといえる。オンラインチュータリングを実施していると回答のあった 41 大学が「オンラインでの学習支援を始めたきっかけ (複数回答可)」として最も多かったのは「COVID-19 の影響 (37 件, 90.2%)」であった。9 割の大学がコロナ禍をきっかけにオンラインチュータリングを開始しているが、1 割の大学はそれ以前からも他キャンパスへの対応等で、オンラインチュータリングを実施していることがわかった。

オンラインチュータリングは、Zoom や Skype 等を活用した同期型 (リアルタイム) チュータリングの実施が最も多く 38 件 (92.7%) であった。ライティング支援は通常対面で実施されているため、そのままりリアルタイム型で実施している様子が見受けられた。加えて、Word 等で文書へのコメントを通じた非同期チュータリングも 15 件 (36.6%) 実施されていた。リアルタイム型のオンラインチュータリングを円滑に実施するには、通信環境が影響するため、大学が学生の通信環境に配慮し、非同期型のオンラインチュータリングを実施したことが推察された。

一方、ライティングセンターを保有するがオンラインチュータリングを実施していないと回答した 14 大学が「オンラインチュータリングを実施していない理由 (複数回答可)」を述べる。回答数は少ないものの、「ライティングセンターのチューターにオンラインチュータリングを実施するノウハウがない (4 件 28.6%)」「学生からのニーズがない (5 件 35.7%)」等の意見が挙げられた。システムの操作やオンラインチュータリング特有の手立てやチューター研修について懸念する現場の声が寄せられた。

そこで、オンラインチュータリングの方略を提示するために、チューターへのヒアリング分析の結果をもとに、オンラインチュータリングの方略とチューターへの研修プログラムの企画・開発を行った。まず、オンラインチュータリングでは、学生と画面を共有して具体的な改善点を共有しながらチュータリングを進めることができたり、緊張感が少なかったりするなどの利点が見受けられた。一方、表情、手元の動き、沈黙状況に関する情報を把握しづらく、受け取れる情報が限られているため、学生の発言の意図を解釈したり、行動を推察したりして、より深い解釈に基づいた質問技法や言葉での丁寧な説明が対面よりも求められることが示された。

「研究課題 質保証のためのチュータリング評価指標・指標別ブレンディッドラーニング教材の開発と評価」に関しては、各大学のライティングセンターに向けた量的な質問紙調査、並びにチューターを対象とした質的な調査に対する結果分析を基に、「質保証のためのチュータリング評価指標」を開発し、その結果をもとにチューターの力に適した体系的な指標別ブレンディッドラーニング教材の開発をした。すでに開発していた研修プログラムに加えて、新たにチューターからの課題として寄せられた「タイムマネジメントのチュータリング、プレゼンテーションのチュータリング、理系レポートへのチュータリング、日本人学生の留学志望動機のチュータリング」等に関するブレンディッドラーニング教材の開発を行った。これらの項目は、質問紙調査の結果からもニーズが高い項目として提示されているため、汎用性が高い研修課題であると考えられる。

<引用文献>

- 藤田正 (2010) メタ認知的方略と学習課題先延ばし行動の関係。教育実践総合センター研究紀要, 19: 81-86
- 岩崎千晶 (2022) 日本の高等教育におけるライティングセンターのオンラインチュータリングを考える。大学教育学会誌, 印刷中
- 岩崎千晶 (2021) 初年次教育における学生スタッフに対して教員が求める能力・経験の導出。日本教育工学会論文誌, 44 (Suppl.): 137-140.
- 自己調整学習研究会編 (2012) 自己調整学習 理論と実践の新たな展開へ。北大路書房
- 北澤武・永井正洋・上野淳 (2010) 大学情報教育のブレンディッドラーニング環境における e ラーニングシステムを用いたフィードバックの効果。日本教育工学会論文誌, 34 (1): 55-66.
- 箕浦康子 (2009) 「フィールドノーツの分析」箕浦康子 (編著) 『フィールドワークの技法と実際: 分析・解釈編』ミネルヴァ書房, pp.18-34.

- 佐藤純・新井邦二郎(1998)学習方略の使用と達成目標及び原因帰属との関係．筑波大学心理学研究，20：115-124
- 瀬尾美紀子(2007)自律的・依存的援助要請における学習観とつまずき明確化方略の役割-多母集団同時分析による中学・高校生の発達差の検討-．教育心理学研究，55(2)：170-183.
- 梅本貴豊(2013)メタ認知的方，動機づけ調整方略が認知的方略，学習の持続性に与える影響．日本教育工学会論文誌，37(1)：79-87.
- Weinstein C. E., Palmer, D. R., & Acee, T. W. (2016) *Learning and study strategies inventory: User's manual third edition*. Clearwater, FL: H & H Publishing.
- 山田嘉徳，岩崎千晶，多田泰紘(2020)論証型レポートライティングにおける学びのプロセスを測定する尺度(DRAW9)の構成．大阪産業大学論集人文・社会科学編，40:1-17
- 山本良太・中谷良規・明賀豪・巳波弘佳・飯田健司・厚木勝之・山内祐平(2017)ラーニングコモンズでの主体的学習活動への参加プロセスの分析：-正課外のプロジェクト活動へ参加する学生を対象として-．日本教育工学会論文誌，40(4)：301-314.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 岩崎千晶, 川面きよ, 遠海友紀, 村上正行	4. 巻 45(suppl.)
2. 論文標題 我が国の4年生大学におけるラーニングコモンズの学習支援に関する現状	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 197-200
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.S45095	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 岩崎千晶	4. 巻 11
2. 論文標題 コロナ禍の高等教育におけるオンライン学習支援	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 グローバル・コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 199-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 岩崎千晶	4. 巻 13
2. 論文標題 初年次教育における論証型プレゼンテーション活動に対するラーニング・アシスタントの介入方法	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 遠海友紀, 嶋田みのり, 千葉美保子, 川面きよ, 松井きょう子, 岩崎千晶, 村上正行	4. 巻 4
2. 論文標題 コロナ禍におけるラーニングコモンズでの支援内容の変化に関する調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 41-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩崎千晶	4. 巻 第12号
2. 論文標題 初年次生のレポートに表出した課題分析とライティングセンターの寄与	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 pp.25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩崎千晶	4. 巻 第12号
2. 論文標題 高等教育におけるオンライン授業の設計	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 pp.139-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩崎千晶	4. 巻 44 (Suppl.)
2. 論文標題 初年次教育における学生スタッフに対して教員が求める能力・経験の導出	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 pp.137-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本敏幸・岩崎千晶・柴田一	4. 巻 2020年度 No.1 (通巻170号)
2. 論文標題 関西大学のオンラインを活用した授業の取組みと課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育と情報	6. 最初と最後の頁 pp.2-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山田嘉徳・岩崎千晶・多田泰紘	4. 巻 40号
2. 論文標題 論証型レポートライティングにおける学びのプロセスを測定する尺度 (DRW9) の構成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪産業大学論集	6. 最初と最後の頁 pp.1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩崎千晶	4. 巻 第11号
2. 論文標題 ITTPCによる国際チューター認証資格に基づくライティングチューターの育成方法	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 pp.43-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 多田泰紘, 岩崎千晶, 中澤務	4. 巻 第11号
2. 論文標題 正課外講習会と個別指導が学生アスリート初年次生の文書作成能力に及ぼす効果,	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 pp.103-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 千葉美保子, 川面きよ, 遠海友紀, 嶋田みのり, 岩崎千晶	4. 巻 第11号
2. 論文標題 台湾の高等教育における学習環境・学習支援のデザイン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 pp.121-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井下千以子, 佐藤広子, 小林至道, 岩崎千晶, 佐渡島沙織, 柴原宣幸, 大島弥生, 成瀬尚士, 関田一彦	4. 巻 41(2)
2. 論文標題 ライティング・センターの機能と展望 : 正課と正課外をつなぐライティング教育を目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 pp. 90-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 IWASAKI, Chiaki, TADA, Yasuhiro, FURUKAWA, Tomoki, SASAKI, Kaede, YAMADA, Yoshinori, NAKAZAWA, Tsutomu, IKEZAWA, Tomoya	4. 巻 Vol. 14 No. 2
2. 論文標題 Design of e-learning and online tutoring as learning support for academic writing	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Asian Association of Open Universities Journal	6. 最初と最後の頁 pp. 85-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1108/AAOUJ-06-2019-0024	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 森朋子, 山田嘉徳, 上島洋佑	4. 巻 41(2)
2. 論文標題 質的研究を考える 学生、教員、職員の学びと成長を捉える学習研究の手法として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 57-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 本田周二・紺田広明・三保紀裕・山田嘉徳・森朋子・溝上慎一	4. 巻 41(1)
2. 論文標題 授業内の他者との関係に対する認識がアクティブラーニング型授業における外化に及ぼす影響	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大学教育学会誌	6. 最初と最後の頁 88-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩崎千晶, 矢田尚也, 多田泰紘, 遠海友紀, 村上正行
2. 発表標題 日本のライティングセンターに従事する学生スタッフとその育成方法に関する現状分析
3. 学会等名 日本教育工学会2021年秋季全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎千晶
2. 発表標題 ライティングセンターにおけるオンラインチュータリングを考える
3. 学会等名 大学教育学会2021年度課題研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 嶋田みのり, 遠海友紀, 村上正行
2. 発表標題 遠隔授業における LTD 話し合い学習法の実践と評価
3. 学会等名 大学教育学会第43回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山田嘉徳, 岩崎千晶, 多田泰紘
2. 発表標題 論証型レポートライティングにおける学びのプロセスを測定する尺度 (DRAW9) の構成と活用
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎千晶, 矢田尚也, 多田泰紘, 遠海友紀, 村上正行
2. 発表標題 日本の4年制大学における悉皆調査結果に基づくライティング支援の現状分析
3. 学会等名 大学教育学会第43回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩崎千晶
2. 発表標題 教員へのヒアリング分析による初年次教育を支えるー学習補助者に求められる能力の分類ー
3. 学会等名 大学教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岩崎千晶
2. 発表標題 初年次教育クラスで活動する学生スタッフに対する担当教員による育成方法
3. 学会等名 日本教育工学会2020年秋季全国大会 (第37回大会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 嶋田みのり, 遠海友紀, 村上正行
2. 発表標題 LTD話し合い学習方法のミーティングによる学生の気づき
3. 学会等名 大学教育学会第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 嶋田みのり、遠海友紀、村上正行
2. 発表標題 遠隔授業におけるLTD話し合い学習法の実践と受講方式の選択要因
3. 学会等名 日本教育工学会2020年秋季全国大会（第37回大会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 多田泰紘, 岩崎千晶, 中澤務
2. 発表標題 初年次学生アスリートを対象としたライティング学習支援プログラムによる文書作成能力と意識の変化
3. 学会等名 第26回大学教育研究フォーラム発表論文集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江木啓訓, 尾澤重知, 椿本弥生, 岩崎千晶
2. 発表標題 教育補助者の熟達と成長をどのようにはかるか,
3. 学会等名 日本教育工学会2020年春季全国大会（第36回大会）プログラム集
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 多田泰紘, 岩崎千晶, 中澤務,
2. 発表標題 継続的なライティング学習支援の効果ー学生アスリート1年生の文書作成能力の成長ー
3. 学会等名 大学教育学会第41回大会発表要旨集録
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 千葉美保子,川面きよ,岩崎千晶,村上正行
2. 発表標題 ラーニングcommonsを巡る国内動向の基礎的調査研究ーラーニングcommonsに関する国内文献レビューを手がかりにー
3. 学会等名 大学教育学会第41回大会発表要旨集録
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 井下千以子,佐藤広子,小林至道,岩崎千晶,佐渡島沙織,柴原宣幸,大島弥生,成瀬尚士,関田一彦
2. 発表標題 ライティングセンターの機能と展望ー正課と正課外をつなぐライティング教育を目指してー
3. 学会等名 大学教育学会第41回大会発表要旨集録
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩崎千晶,川面きよ,遠海友紀,村上正行
2. 発表標題 図書館の評価研究事例からみたラーニングcommonsの評価方法に関する研究
3. 学会等名 日本教育工学会2019年秋季全国大会講演論文集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩崎千晶
2. 発表標題 高等教育におけるアクティブラーニングのデザイン
3. 学会等名 産業技術短期大学FD講演会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩崎千晶
2. 発表標題 主体的・対話的で深い学びを促す授業実践を考えよう！その1 授業設計
3. 学会等名 堺市教育委員会中堅教員研修（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 嶋田みのり、遠海友紀、村上正行
2. 発表標題 LTD話し合い学習法による能力変化に対する学生の自己認識
3. 学会等名 日本協同教育学会第16回大会要旨集録
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 嶋田みのり、遠海友紀、村上正行
2. 発表標題 LTD話し合い学習法の実践が学生の読解力に及ぼす影響 読解方略に着目して
3. 学会等名 日本教育工学会2019年度秋季全国大会講演論文集
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 森朋子・山田嘉徳・上畠洋佑
2. 発表標題 質的研究を考える 学生、教員、職員の学びと成長を捉える学習研究の手法として
3. 学会等名 大学教育学会第41回大会発表要旨収録
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山田嘉徳・関田一彦
2. 発表標題 大学教員が抱く授業観の探索的検討 質問紙調査から見えてきた課題
3. 学会等名 大学教育学会第41回大会発表要旨収録
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 岩崎千晶 12章：正課と正課外の連環を目指した関西大学のライティングセンター	4. 発行年 2022年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 288
3. 書名 思考を鍛えるライティング教育－書く・読む・対話する・探究する力を育む－	

1. 著者名 岩崎千晶	4. 発行年 2022年
2. 出版社 関西大学出版部	5. 総ページ数 260
3. 書名 大学生の学びを育むオンライン授業のデザイン	

1. 著者名 山田嘉徳 第4章：学びの環境 個人と環境とのかかわりを捉える社会文化的視点	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 200
3. 書名 教育・学校心理学 子どもの学びを支え、学校の課題に向き合う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

オンラインチュータリングによるワンポイント講座の実施（岩崎・多田が講師を担当，動画・教材を公開）
<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/onepoint-advice/index.html>
 オンラインチュータリングの予約方法
<http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/appointment/index.html>
 オンライン相談の実施方法
http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/onlinetutoring_guide_for_students202003.pdf

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村上 正行 (Murakami Masayuki) (30351258)	大阪大学・全学教育推進機構・教授 (14401)	
研究分担者	多田 泰紘 (Tada Yasuhiro) (40813663)	京都橋大学・経営学部・専任講師 (34309)	
研究分担者	山田 嘉徳 (Yamada Yoshinori) (60743169)	大阪産業大学・全学教育機構・准教授 (34407)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関